

多言語使用児童の translanguaging の「社会言語学的」分析

—継承語使用と「声(voicing)」—

山下里香(日本学術振興会特別研究員 PD、東京大学東洋文化研究所)

1. はじめに

社会言語学的な多言語使用研究の最大の関心は、複数言語の話者がどのように複数言語を用いるか、また各言語の使用が会話内およびコミュニティとしてどのような指示的かつ社会的な意味をもつかである。その方法も、頻度を見る量的なもの、言語形式や談話の構造といったもの、アンケートやインタビューといったもの、民族誌的なものなど、多岐にわたる。

一方、近年の外国語教育や母語・継承語の教育に関連する応用言語学関連においては、「多言語使用」像が理論的に更新され、議論されている。

本発表では、コミュニティ内の自然談話において在日パキスタン人児童が継承語を使用したあるエピソードを、コミュニティのコンテキストおよび会話のコンテキストを踏まえながら分析し、応用言語学で提唱されている理念を、社会言語学的に裏付けることを試みる。

2. 理論的および方法論的背景

2.1 多言語併用現象の語用論研究

多言語を併用した会話における言語選択ないし切り替えに関しては、様々な理論的観点から説明がなされている。ここでは、そのうちの語用論的なものを二つ挙げる。

ひとつは、言語選択にはそれを制御する語用論的な枠組みがあり、そのような枠組みを用いていることや、共有していることが、話者の言語知識やアイデンティティの一部であるという考えである。もうひとつは、話者の言語選択が、話者がその場その場でとりたい立場(スタンス)やアイデンティティを考慮して判断するものであり、社会構築的であるという考えである。日本語を用いる移民コミュニティの多言語使用に関する研究では、前者が中心だった(例えば Nishimura (1997) やナカミズ(2003))。

これまでの発表者の研究では、Nishimura やナカミズを踏襲し、引用のみに見られたウルドゥー語使用が、会話においてそのコントラストにより語用論的なインパクトをもたらすとした(Yamashita, 2013a)。しかし、必ずしも語用論的なインパクトで全ての言語選択は説明できない上、言語の切り替え自体が意味の生成に関わっている

とは言い切れなかった。なぜならば、A 言語に切り替えることで、話者の間で共有されている、A 言語と結び付けられる意味領域が関連しているからであり、先に挙げた後者の観点が関与してくるからである。また、話者の言語選択のメカニズムも、通時的に変化する。例えば、1 年半の間でさえ同じ場面の同じ話者の使用言語は変化する(Yamashita, 2013b)。

2.2 Translanguaging という見方

言語教育、特にバイリンガル教育で提唱されている概念のひとつとして、translanguaging がある。Translanguaging (Garcia, 2009) とは、一度に一言語などというルールにしばられない柔軟な多言語使用のことである。Translanguaging と見なされる行為は幅広く、具体的には、翻訳やメタ言語的なコメントなど、形式上で多言語でなくても、多言語のメタ言語的かつメタ語用論的知識を前提とする言語使用なども、含まれている(Garcia and Li, 2014)。同時に、その定義の中で、社会的・心理的に肯定的な効果を多言語話者にもたらすという主張もなされている。従来の規範とされてきた単一言語主義を脱し、このように現実の多言語使用に対して肯定的な態度をとることは、近年の社会言語学の思想とも親和性が高いように見える。

2.3 本稿の目的

Translanguaging が様々な創造的な多言語使用を含むことは画期的ではあるが、教育理論の文脈で生まれ、その中で議論されることが多いため、教育の理念や「効果」といったものが概念に内在している。そのため、そうした理念に共感できず、「効果」に対して懐疑的な立場には、translanguaging は理解されない。Translanguaging が実際どのように起こっているかボトムアップ的に記述をし、社会言語学的に説明を試みる必要がある。

そのために発表者が有効だと考えた概念は、「声(voicing, voice)」(以下「声」)である。「声」は小説の中の多声性を論じるためにバフチンが文学分析に用いた概念である。この概念が言語人類学に持ち込まれ、今日まで使用されている。最も古典的な Hill (1995) では、メキシコのある村の農夫の語りにおける、Mexicano 語とスペイン語の切り替えの分析を行った。語りにおいて、Mexicano 語は農業や村の生活や精神の健全さや道徳と、

- アーンの###している)
- 15 アリー; *ye quraan kid'ar #####?* (これはクルアーンのどこ###)
- 16 カリム; *ey?*
- 17 アリー; *saudii #####?* (サウジの###?)
- 18 アリー; *paakistaan men ##### huaa? @@* (パキスタンで#####だった?)
- 19 カリム; <やや低く、調子の異なる声> *paakistaan muhammad sallallahu aleiwassalam 'aayee t'e* (パキスタン、ムハンマド彼の上に平安あれ がいらした)
- 20 カリム; <まだ調子の異なる声>### *hijrat* から
- 21 ジャミラ; え、そうなの?
- 22 カリム; <調子の異なる声のまま、標準日本語と異なるイントネーション> *そうだよー*
- 23 イムラーン; @[@@@
- 24 アリー; [@@@
- 25 ジャミラ; うそだー
- 26 アリー; @@@@
- 27 イムラーン; うそだー、絶対ないよ。
- 28 アリー; <明るい音色の声>頭大丈夫?
- 29 カリム; @@@だ[い丈夫大丈夫<笑った、少しふざけ気味の声、最後の bu の u が強い>
- 30 イムラーン; [パキスタン、あの人がねー@@.
- 31 カリム; 大丈夫ー<笑った、少しふざけ気味の声、最後の bu の u が強い>
- 32 アリー; <明るい音色の声>### *Muhammad Sallallahu* は、あ-ウルドゥー語しゃべったの?(ムハンマド彼の上に平安あれ)
- 33 アリー; <鼻笑い>@
- 34 イムラーン; え
- 35 アリー; @@@
- 36 カリム; *muhammad sallallahu [aleiwassalaam* (ムハンマド彼の上に平安あれ)
- 37 ジャミラ; えでもこれアラビア人って積極的だだって
- 38 イムラーン; ### すぐ覚えられる
- 39 ジャミラ; ていうか覚えられるっていうか、なんて書いてあるか全部わかるって
- 40 イムラーン; つか、覚えてるよね
- 41 ジャミラ; うんうん
- 42 ジャミラ; おぼ、おぼ、だって意味わかれば覚えるの簡単じゃん
- 43 カリム; 今先生帰ってこない
- 44 イムラーン; 一瞬見ればわかることだよ

- 45 ジャミラ; うん
- 46 イムラーン; あ、こんななんだ、うーん、じゃあ読もう、はいはいはい
- 47 ジャミラ; 意味わかってて楽じゃん、なんて書いてあるか全部わかってるし
- 48 ジャミラ; だからうちらだって翻訳しなくてもいいし
- 49 カリム; だから、俺も♪英語よりアラビア語覚えたい♪
- 50 イムラーン; でもー、#####じゃ無理ー♪

I 児童の行動を管理する「声」

授業中、誰もクルアーンを音読をしていないため、アリー先生が児童らにクルアーンを音読するように言っているところからこの切片は始まる。アリー先生は児童らの名をそれぞれ呼び、音読するように促す。その中にライラの名前がない。カリムは「ライラは?」と何度繰り返してライラにもその促しが及んでいることをアリー先生に明示的にさせる(04-05行)。そしてカリムは「だめだめー」と述べる。このカリムのいずれの発話も、きちんと授業内のタスクをやるべきだというスタンスをとっており、指示されタスクに専念する自己ではなく、教師のように他の行動を監視し管理する立場としての「声」を構築している。

II 宗教的権威の「声」

12行でカリムは突然、独特の節をつけ、やや低く通常と異なる調子の声のウルドゥー語ですらすらと「我々の祖国はパキスタンである」と言い始め、クルアーンとパキスタンに関係があることを延べる。日常とは異なる節回し、かつウルドゥー語であることで、カリム自身のことばではなく、まるでどこかで宗教的権威の説話からとってきたように聞こえる。先生のパキスタンとクルアーンの実事関係²を問うていると思われる質問(15行、17-18行)に答えず、引き続き、同じ声の調子かつ同じくウルドゥー語で、預言者ムハンマドがパキスタンにいたと述べる(19行)。この発話は、預言者ムハンマドという重要人物が言及されるという点で、12-14行の発話内容よりも情報が具体的である。一方で、事実関係としては「大ウソ」でもある。

III 宗教的権威かまがいのものかーあいまいな「声」

カリムはアリー先生の質問に答えず、17行でその不思議な声質のまま日本語に切り替え、年号という具体的な情報を出す。情報がより具体的になることにより、指示的には真正性が高まるはずだが、ここではウソを塗り重ねている。その結果、ジャミラも沈黙を破り、カリムにその情報の真正性を質問する(18行)。ジャミラは、自分の弟であるカリムのことを特別に知識の権威と思っておらず、知識を疑ったり議論したりすることが多い。しかしその彼女でさえ、驚いた調子で「そうなの?」と20行で聞いている。

1 'Muhammad sallallahu aleiwassalam' はアラビア語の文句で、字義通りに訳せば「ムハンマド、彼の上に平安あれ」であるが、「彼の上に平安あれ」は預言者などの聖なる人物に対して、イスラーム教において敬意を表すために用いられる文句である。そのため、意味的には「ムハンマドさま」と同義である。

2 パキスタンは20世紀に生まれた国家であり、7世紀に編纂されたとされるクルアーンのどこにも言及はない。

カリムは不思議な声質のまま日本語で答える。イムラーンとアリー先生は笑う。ここで「魔法が解ける」。イムラーンとアリー先生の笑いにより、ジャミラは25行で、ウソであると判断したことを示す。

IV うさんくさく、ふざけた「声」

28行でアリー先生が、笑いながら「(カリムの) 頭大丈夫?」と聞く。カリムは「大丈夫大丈夫」と述べるが、イントネーションやアクセントが非標準的であり、またカリムが通常使う日本語よりも母音が強く発話された「外国人風の日本語」に聞こえる。ややふざけた調子で言うことにより、カリムは、指示的には自分の頭が大丈夫だと述べているが、非指示的には、そもそもこのような大ぼらを噴いているのは、これまでの「声」の主であった、自分ではない(架空の)人物であることを表現している。

V 「アラビア語VSウルドゥー語」問題に対する自分の「声」

カリムの頭がおかしいとからかった後、アリー先生は、預言者ムハンマドがウルドゥー語を話した³か聞いて、さらにカリムをからかっている。この発話に対し、児童らからの笑い声は聞こえず、アリー先生の笑いのみ聞こえる。このアリー先生の発話に反応したと思われるのが、37行以降の児童らの発話である。中東滞在経験を持ち、アラビア語が話せ、宗教的知識も持つ(そしてウルドゥー語を母語としない)アリー先生が、アラビア語を理解しない児童にとっては常に楽しいとは言えないタスクであるクルアーンの音読をもっと一生懸命にするように求める教室内のストレスが、ここで愚痴として表される。ジャミラとイムラーンは、アラビア語母語話者なら、クルアーンの内容もわかるので、アラビア語を理解しないジャミラらと比べてずっと楽で楽しく音読ができるため、同じように積極的に音読することを求められるのは筋違いであると述べているようである。また、48行では、クルアーンの内容の(日本語への)翻訳の大変さにも言及している。一方で、カリムは29行で「俺」と自身について言及する。これは、先とは異なり、カリム自身の「声」といえるだろう。カリムの「英語よりアラビア語」という発言は、先とは打って変わってアラビア語の権威を認め、自分もその権威に同化したいかのよう解釈できる。この発話にはメロディがつくが、カリムは他者の「声」としてよりは、主張や独り言にメロディがつくことが多い。

5. 本稿のまとめ

このわずか数分の中でカリムは、イントネーションやアクセント、調音的特徴、節、言語の切り替えの全てを駆使し、他の発話者を巻き込み、おとなしくクルアーンを音読するという求められたタスクからの逸脱行為を、ことばのみで行った。カリムはIからIVまで、パキスタ

ンにも宗教的権威があるという架空の「事実」を、自身とは異なる「声」を用いて構築した。そしてその逸脱行為は、単なるタスクからの逃避ではなく、教師が押しつける、絶対的宗教的権威のあるアラビア語の象徴的権力および教室内の行動を管理する権力に対し、実はウルドゥー語ないしパキスタンにも宗教的権威が存在するというフィクションを、権威のある口調で語ることにより、非指示的に挑戦したと解釈できる。一方で、カリムではなく、誰のものかわからない他者のフィクショナルな「声」を使うことで、カリム自身の精神性(spirituality)・道徳性(morality)、また身体や知能の健全さ(sanity)が保証されるように語りが構築されている。また発話が、アラビア語が流暢である教師のもつ絶対的な権威への挑戦だということは、非指示的に教師にも他の児童にも理解されていた。

このようなエピソードは、多言語使用を行っている児童らが、生活における意味世界をよく理解し、言語活動を通じて複数の言語の間を行き来し、自らの世界観を作り上げているという、translanguagingの捉え方と合致している。本稿では、「声」に注目して分析することで、児童らがどのような言語的特徴を、話の真正性と結びつけているかについての示唆が得られた。そのため、「声」の分析は、translanguagingの現象を証明するのにも有用であると考える。

参考文献

- Garcia, Ofelia (2009). Education, multilingualism and translanguaging in the 21st century. *Social justice through multilingual education*, 140-158.
- Garcia, Ofelia and Li Wei (2014). *Translanguaging: Language, Bilingualism, and Education*. Palgrave Macmillan.
- Hill, Jane (1995). The voices of Don Gabriel: Responsibility and self in a modern Mexicano narrative. *The dialogic emergence of culture*, 97-147.
- Meek, Barbara A. (2007). Respecting the language of elders: Ideological shift and linguistic discontinuity in a Northern Athapascan community. *Journal of Linguistic Anthropology*, 23-43.
- ナカミズエレン(2003). コード切り替えを引き起こすのは何か. *言語*, 32(6): 53-61.
- Nishimura, Miwa (1997) *Japanese/English code-switching*. Peter Lang.
- Yamashita, Rika (2013a). Heritage language quotations in peer interactions: A preliminary study on Japanese-Urdu codeswitching. *ことばと人間*, No.9, 71-81.
- Yamashita, Rika (2013b). Peer Effect in Language Choice: Japan-residing Pakistani Pupils in Classroom Conversation. *東京大学言語学論集* 34, 231-246.

³ 預言者ムハンマドがウルドゥー語を話していた可能性は皆無である。